令和5年度
「おくのほそ道」最上町俳句大会

入選作品

大類つとむ　先生選

◇中学生の部（優秀句）

釈迦像の手に絡みつく蜘蛛の糸　大阪市立長吉六反中学校　三年生　平嶋　優貴

武道館田水と共に沸く歓声　新庄市立明倫学園　九年生　伊藤　漣

銀世界街を包んだオルゴール　新庄市立明倫学園　九年生　大塚　姫歌

◇小学生６・５・４年生の部（優秀句）

北風の笛にあわせて葉がおどる　大堀小学校　六年生　田中　玲凪

父さんと話もはずむくりごはん　向町小学校　六年生　菅　秀人

夏蝶を立たせてしまう靴の音　向町小学校　五年生　田室　静琉

◇小学生３・２・１年生の部（優秀句）

秋の声道はどこまでもつづいて　犬山市立犬山北小学校　二年生　福田　光翔

きりぎりすまんげつの日にないている　向町小学校　三年生　阿部ましろ

まってたよおぼんにみんなそろうかお　向町小学校　一年生　結城　栞

大類つとむ　先生選

◇一般・高校生の部

赤倉ゆけむり館賞

最上川一軒宿の柚子湯かな　神奈川県横浜市　どこにでもいる田中

特選

縄文の女神のやうに西瓜抱く　東京都練馬区　正甫

優秀

宿の子に貰ふ紫通草かな　宮城県大崎市　木村一枝

風の押す汗の笈摺番外寺　山形県東根市　菊地みさ子

佳作

すれ違ふこまちとつばさ青田風　神奈川県川崎市　大木雪香

もくとうのせみのこえだけきいている　埼玉県川越市　大紀直家

湯冷めしてぽとんと何か落ちた音　東京都練馬区　郁子

入選

玩具みな箱に入れられ赤のまま　愛知県犬山市　福田匠翔

星屑の弾けてゐたる焚火かな　神奈川県横浜市　山田知明

ポケットの木の実帰りは地へもどす　宮城県大崎市　遠藤克子

有路家の留守預かりて障子貼る　宮城県大崎市　京極久也

かなかなや昔一里の下校道　大分県大分市　小野道山

講評

「選を終えて」

大類つとむ

芭蕉、一茶、子規、山頭火などの皆に知られた名句の殆どは、知らない言葉や難しい言葉を使ってはいない。むしろ私たちの日常会話の中に自然に出てきそうな言葉だけで出来ていると言ってもよい。いや、だからこそ多くの人に愛され続けているとも言えよう。これは極めて難しいことである。当たり前のように知り使っている言葉も、俳句をつくるとなると信じられないほど出て来なくなってしまう。誰しも覚えのある事であろう。カッコよく、それらしく、そして芭蕉のような雰囲気で・・・として強引に馴れぬ言葉を使ってしまうことになる。頭の中に充分この事を認識して、決して背伸びをしない等身大の句づくりを心掛けてほしいと願うものである。

「秋の声道はどこまでもつづいて」

空気がよく澄んで自然や人の営みなどのあらゆるもの音が実感できる気配の季節、これが「秋の声」である。この句の「道」は目の前に伸びる一筋のものとも、あるいは目には見えない心の中の道と考えても良かろう。小学低学年の句とは思えぬどこか奥深い作となっ

た。

「夏蝶を立たせてしまう靴の音」

翼を休めている夏蝶に息を殺して近づこうとすると、靴の音がしてスィッと逃げられてしまった。「夏」が生き生きとした空気感を表わし、自分の靴音ではなく誰かの靴音と考えると一層面白くなる。瞬間を捉えた「あっ！」という快作である。

「釈迦像の手に絡みつく蜘蛛の糸」

何よりすぐ光景が見えるのが心地良い。私たちを救おうと瞑想する御仏の指を、蜘蛛が捉えているのかそれとも蜘蛛がその指に捉えられたのか。御仏と多くの人が好まない蜘蛛とが言い難い空気を表している。

「縄文の女神のやうに西瓜抱く」

縄文土偶と西瓜はどう考えても私たちの頭の中で結びつくものではない。しかし五七五という美しい容れものの中に入れると、見事にひとつの言葉では尽くせない新たな空気が生まれ出てくる。モデルのような痩せ型もあればまるで妊婦のような豊かな生命力を思わせるものもいる。西瓜を抱えたような女神、ンー、イルイル。

「最上川一軒の宿柚湯かな」

冬至の日を最上川沿いにポツンとたつ一軒宿で過ごす。賑やかな温泉街と違い、滔々と流れる最上川の夕暮れは格別であろう。あきらかにモノクロの風景を浮かべるが、その中に鮮明な柚子の黄色だけがプカリプカリと揺れ動く。まさに俳句である。